ＮＰＯ学習塾全国連合協議会西日本ブロック

ＮＰＯ塾全協 ブロック通信

2017
12月

西日本ブロック事務局　〒564-0027 吹田市朝日町14-2 大松ビル４Ｆ　共学館義塾内　TEL (06) 6382 1224　FAX (06) 6382 1560

11月4日「次世代のリーダーづくりと変わる高校入試」というテーマで第43回NPO塾全協全国研修大会が10年ぶりに沖縄で開かれました。100名近くの方々にご参加いただきましたが、奈良の西大和学園の創始者である田野瀬良太郎氏の講演から組織作りのヒントを得た塾人も多かったのではないでしょうか。

また七つの都府県の会員から各地の入試制度や入試問題の変遷についての報告があり、入試全体のこれからの進む方向が見えてきました。

開会の辞　沼田広慶（NPO塾全協全国会長）

経産省で産業構造ビジョンとAI、ロボットを活用する技術革新によって第1は自動車運転の改革、第2に工業の生産システムの改革、第3に健康・医療の改革、第4に日常生活の暮らしの改革、この4つの分野を改革していこうということで日本のあらゆる分野の事業が再編成されるであろうといわれています。この波は教育界にも押し寄せることは明らかです。まず第1にはAIを作る科学者や工学分野で抜きんでた人材を多く養成しなければなりません。2020年度からプログラミング教育が必修化されます。またタブレット端末を使ったデジタル教科書が導入されることになっています。 2045年のシンギュラティの話を持ち出すまでもなく、我々は正に運命的な変革の時代にいると言っても過言ではありません。そこに生き抜いていかなければならないのが子供たちです。今ここにいる子供たちが未来を支えていかなければならない。その教育を如何にすればよいのか。今回の研修大会が何かしらの示唆を与えることができれば幸いです。

教育はその国の民度を表すものだと思います。民間における自由な教育の場を確保することは自由な民主社会を発展させ活性化させるエネルギーを生み出すことになると思います。本日ご出席の皆様の益々のご発展を祈念しますとともに、実り多い研修となりますことを祈念いたしまして挨拶とさせていただきます。

大会委員長挨拶　後田多純寿（第43回研修大会実行委員長）

今回沖縄で研修大会をやることとなりましたが、10年前にも1度やっています。沖縄の塾の方々に集まっていただいて勉強してほしいですが、今回は多くの塾の方に来ていただいて本当にありがとうございます。今回の研修では田野瀬先生に来ていただきました。西大和学園のことをうちでバイトしている琉球大生に訊いてみたら誰も知りませんでした。田野瀬先生から学ぶことはたくさんあると思います。我々沖縄が一番学ぶべきだと真剣に思いますのでしっかり聴いてくだされればと願っています。2部は会員からのレポートということで高校入試がどんどん変わってきていますのでそれを発表してもらいます。今回県外からもたくさん来ていただきました。皆様にとって有意義な研修大会であることを祈念いたしまして挨拶とさせていただきます。

私学の挑戦を私学が学ぶ「西大和学園の奇跡」　　田野瀬良太郎氏

学校作りを始めるきっかけは、どうしても私の政治活動と密接な関係があって私の政治活動から学校作りが始まったそんな話から始めたいとと思います。
高校時代にどうしても海外に行きたいと夢に出てくるくらい思っていたのですが、55年ほど前の当時の日本の簡単に海外へ行ける国ではありませんでした。
高度経済成長時代に入り、いよいよ日本人を海外に行かそうとなった最初の年だったと思います。アルバイトで３０万円稼いで大学3年の時に休学届けを出して行きの旅費10万円、帰りの旅費10万円と残りのお金10万円を持って横浜から船に乗りました。当時、ソ連のナホトカという港町に着いてシベリア鉄道を乗り継ぎ10日間かかってモスクワに着き、そこからまた乗り継ぎフィンランドのヘルシンキまでが丁度、旅費10万円でした。

後はヒッチハイクで行くしかない。相手から見て私はめったに見ない外国人だから気持ち悪がられてなかなか車が止まってくれなかったが、それでも半日に1台くらいは止まってくれました。夜は野宿して早朝からまたヒッチハイク、パンやトマトを買って食べながらそんな旅を丁度1年間、33カ国を回ってきました。
モスクワに着いたとき、当時はソ連という社会主義国家だったので自由に旅行させてくれなくて、国の旅行会社があるのですが、そこへ行って初めて英語をしゃべった。中高と習ったのでいくらでもしゃべれると思っていたが、向こうも英語でしゃべるのですが何を言ってるのかさっぱりわからない。後ろで並んでいる外国人がブーブー文句を言い始めるし相手の旅行者の女性も嘲笑の眼差しで私を見るしどうしたものかと思ったが、紙に書いてもらうと明日の朝バスは何時に乗るのかとかそんな簡単な英語がやっとわかりました。
せっかく留年届けを出して日本から出てきたのに英語がしゃべれないとこの旅の意味が半減するなと思い、ヘルシンキからスウェーデンのストックホルムにヒッチハイクで行き、朝７時から夕方４時までホテルのコックの助手をして魚の頭をちょん切ったりジャガイモをむいたりして４時から夜１１時まで空港のカフェテリアでワゴンを押したり食器を洗ったりしながら毎日クタクタになるまで働いて、２軒とも食べ物屋だったので食事はただでいっさいお金を使わずに２カ月間で５０万円貯めました。
そのお金を持ってイギリスのブライトンという町の語学学校に入学しました。私以外の人たちはスイスとかフランスとか他のヨーロッパの国から来ていて英語は喋れるけど文法ができないので文法を学びにその学校へ来ていたのですが、私は文法はできるけど喋れないというずいぶんと事情が違いました。
成績は１番で入学しましたので５クラスある中の１番上のクラスに入ったものの、さっぱり分からず、結局一番下のクラスに入れてもらったが、それでも分からない。２ヶ月ほどして３０万円使ってなんとか日常生活に困らないところまできたので、日本人は金持ちと違うのか、途中で辞めるのは怠け者かとずいぶん責められましたが、もうお金がないので辞めるしかないと言って、そこからまた他のヨーロッパの国々を回った後、イラン、イラク、アフガニスタン、パキスタンとバスを乗り継いでインドまで行き、そこからカンボジア、タイと回った。そこで、日本ってどんな国だ、戦争で叩きのめされたのに何故世界第２位の経済大国になれたのかとか、自分は外国に関心があって来たのにそこでは日本について考えなければならないという機会が多くなった。海外へいくと逆に日本のことがよく分かる。バンコクにたどり着いて友人にも本を送ってもらい毎日、日本のことを考えました。日本が一番だと思うと同時に、日本のこんなところやあんなところを直したい、日本の世直しができるような仕事につきたいと考えるようになって政治家になろうと思ったのが、後に政治の道を歩んだきっかけです。

日本に帰ってきてそうは言っても政治家の家系でもなく選挙についても全く知らなくていきなりそうなる訳にもいかなかった。それで名古屋工業大学を出て研究所に勤め、サラリーマン生活を始めました。当時は求人がすごく多くて支度金をくれるような会社も多かった、そんな時代でした。
将来は独立したいと考えていたので大企業より小さな研究所に入って５年勤めましたが、政治家になりたいという思いがだんだん募ってきた。それで家内を説得して生まれ故郷の奈良県五條市に帰りました。その年の１１月の市会議員の選挙を目指して同級生の家を回ったが、だいたい青年団の活動や自治会活動をしてから市会議員に立候補するものだが、いきなり立候補とは何事かと初めのうちはだれも認めてくれなかったが、必死にお願いして行くうちに一人二人と支持者が増えていった。その時の選挙に当選して政治の世界に飛び込んで初めて知ったが、田舎の市会議員から国会議員になる人はほとんどいない。国会議員の７、８割は世襲の２代目で残り２、３割が官僚出身でいきなり国会議員になるというのがほとんどのケースで、初めて国会議員になっって国会議事堂の席に座ったときも隣は角栄さんの娘の田中真紀子さん、こちら側はハマコーさんの息子の浜田靖一君、野田衆議院議長の娘の野田聖子さんと２８人の新人議員のほとんどが二代目ばかり、あとは官僚出身という感じで市会議員から上がってきたのは私一人でした。二代目といっても必ずしも選挙に通る訳ではありません。どんどんすべります。

市会議員になったとき、これを何回もと考えるととても国政まで届かないので県会議員にならせてほしいというと、自民党の先輩議員から「みんな何度も市会議員の当選してから県会議員にいくのに、お前は新人類か！」と叱られました。「そんなことをするならえらい目にあわせてやる！」と青年部長をしていたのを剥奪されたりした。でも上に行かないと間に合わない。永田町の論理では４０代で国会に出てこないと間に合わない、５０代では遅すぎるとなるのですが、市会議員になってそれを言っても叱られるばかりで、それでも県会議員に立候補して結局、無理がたたって選挙に落ちてしまいました。
一度選挙に落選すると人心が塩を引いたようになくなってしまう。また４年後と言って、去っていった人たちを起こしていく仕事なのでなかなかつらい。それでも４年がんばったら次の県会議員はトップ当選しました。当選するやいなや、俺は次に国会議員にいくと言ったら案の定叱られて、また「お前は心中するんか、こんなはた迷惑なことはない」、当時奈良県は全県一区で５人当選できるが自民党は３人いて「お前がいくとこの３人がえらい目に会う、いくなら無所属でいけ」と言われ、役職は剥奪されるし自民党は辞めさせられるし、また無理がたたって選挙ですべってしまいました。よく世間では田野瀬は順風満帆に歩んできたなあと言われますが、私は選挙で２回すべって浪人を概ね８年しているんです。次の衆議員選挙では５番目のすれすれで４９歳で初当選しました。それから目標の国会議員になって６期当選しましたが、さあこれからというときに当初から政治家の潮時だと思っていた７０歳になってしまい、５年前に引退してそれからは学校経営に専念しているという次第です。
実は市会議員から県会議員になるという時の４年間の浪人生活のときに収入が途絶えてしまうのが一番つらかった。乳飲み子がいる家族を養って行かなければならないし、とにかく日銭がいるというときに、家内がミシンを借りてきて夜中の２時３時までコトコト水着か下着を縫っていました。私は当時、大阪がマンションブームでマンションの基礎作りに日当１万５千円か２万円もらってマンションの壁に防腐のための糊を塗って一日終わると糊だらけになってました。しかしこんなことをしていても次の選挙の見通しは立たないし、生活だけは経済的に安定させないとだめだということで、よくピンチがチャンスだというけれど逆境に追い込まれるとくそ力が出るというか真剣に考えて思いついたのが、家内が独身の頃、名古屋で保育士をしていたので、よし保育所を作ろう、俺が理事長でお前が園長になれと言った、私が３６歳家内が３４歳の時でした。
保育所を作るといっても土地がいるから、あるお百姓さんにこの土地貸してくれないかと相談したら、捨てる神あれば拾う神ありで「こんな米が幾らもあがらないような老けた土地なら年間５万円でよろしいわ、早いとこ経済的に安定させなあかんで」と言うていただいた。その方はこのあいだ亡くなってしまわれましたが、私の生涯の恩人です。
土地が確保できたので、次に建物を建てるのに金がいる。銀行に相談したら土地を見に来て、３０年ローンで貸すから、まず社会福祉施設を作るのに公的に借り入れできるから、そこから借りるように言われて結局、合わせて５千万円借りました。保育所の最低人数６０人の小さな保育所を作るめどができ４

月にオープンしましたが、案の定４月に３０人しか園児が来てくれなくて困ったが、当時五條の町に１０ほど保育園がありましたがいずれも３時までしか園児を預からないとか３歳以上しか預からないという所ばっかりだったので、６時まで延長保育をして０歳児まで預かるという方針を打ち立てたところ、８月くらいに定員の６０人に達した。理事長の私は無給でしたが、ようやく園長の家内が延長保育で給料を取れるようになって、県会議員の選挙に出られることになりました。保育園に行くとどのクラスからも元気のよい歌声が聞こえ、子供たちは喜々として走り回っている。教えたことは全部覚える。無限の可能性を秘めた教育というのはこんな素晴らしい仕事があったのかと、つくづく痛感しました。その思いがどんどん膨らんでいって将来学校を作ってみたいという気持ちになりました。それでも一方で県会議員を目指しているわけですが、当時は団塊の世代の子供たちで急増の時期だったので、毎年どの県

もどんどん公立高校を作っていました。当時奈良県の公立と私立の高校で高校生を収容できなくて、大阪の私学へ毎年５千人通っていました。これはまさに人材の流出ではないかと、県議会でも盛んに議論しました。私が奈良県に学校を作りたいと話すと、今では考えられないことですが県も大いに喜びました。公立で学校を作るのは各地の引っ張り合いで、議論してもなかなか難しい。私学を作ってもらえるならありがたいことだ。ということでそれでも奈良県中の土地を探し回るのですが、当時、西大和地区は人口急増率が全国１位か２位で、そこにニュータウン開発会社が、虫食いのようになっていてまとまって確保できない塩漬けになっていた土地があったので、開発会社と話すと地主と話しがつけば、原価で売ってもよいというので、朝駆け、昼駆け、夜駆けで話をつけに行って1万5千坪の土地をまとめるのに成功しました。当時の三和銀行の大阪本店に話すと全国の私学に融資している私学部長が一度土地を見に行きましょうと行くと、クヌギ林の山に入った途端、「田野瀬さん、やりなはれ、いくらでも融資します」といってくれた。その土地の沿線に王子駅というのがあってそこが奈良県で一番乗降客が多い駅なんです。それと今は老齢化してしまいましたが、当時は子供たちが多いニュータウンに囲まれた土地でした。学校というのは下るより上っていく方がよい。駅からちょっと高台にあって上っていく所にあると3拍子そろっている。当時は子供がどんどん増えていく頃で、これは必ず成功すると銀行も強気でした。これも私学振興財団という公的機関と銀行を合わせて30億貸してもらいました。これが西大和学園高校、2年後に中学をやることになったいきさつです。私の政治活動の原点は世界一周一人旅ですが、学校作りの原点は保育園で教育に出会ったのがきっかけです。

それから企業の駐在員の奥さん方の要望があって西大和学園カリフォルニア校を作ったものの、100人ほどの生徒で採算が合わず１０億の赤字で苦労しましたが、現地校に行っている生徒を対象にした土曜だけの補習校が当たり、幼稚園を作ったりしてようやく経営が成り立ってきました。白鳳短大も一般教養の学部で赤字が続いたが、資格が取れる保育士・幼稚園教諭、看護科、理学療法士や作業療法士などになれる医療系の学科にニーズが合って順調に来ることができました。

そして大阪ー京都間を200カ所ほど探して大阪の吹田市にJR西日本が持っていて眠っていた土地に設立したのが大和大学です。初めは保健医療学部、教育学部と作って昨年春に政治経済学部を作り理工学部の建物がすでに着工しています。

政治経済学部は、現在52,3の偏差値ですがやがては関関同立を凌ぐ、東の早稲田、西の大和というくらいにしたいなと思っています。

ここから本題の西大和学園中高の話です。

全くの素人だったので初めは、体育の先生に野球で甲子園に出ろと言い、サッカーの先生にインターハイに行って全国優勝してこいと言い、英語や数学の先生をつかまえては、とにかく補習してでもいい大学に入れてくれと言ったら、新規募集で来たやる気満々の若い先生ばかりだったので生徒の取り合いで、生徒はどの先生のことを聞けばいいのか混乱して父兄からもクレームが来るし、先生は子供の奪い合いをする。あれもこれもは難しいというのに半年経って初めて気づいた。これは方針をはっきりさせる必要があるので、全国の学校を回って聞くと、これからの人口減を考えると進学校でいかないと生き残れ

ない、ということで方針を定めて、部活を制限すると体育の先生から猛反発を食らった。他の先生も人間教育だとか色んな意見があって路線闘争と言うのが長く続きました。ただ2人の先生が私を支持してくれて周りを一人二人と徐々に説得してくれて、私も体育の教師を何回も酒を飲みにつれて行きました。それで10年くらい経って生え抜きの34歳の先生を奈良県で一番若い校長にしたときに、ようやく進学校でいくことにまとまりました。そこからはとんとん拍子で進学実績が伸びた。70～80人の教師全員が一致したことが一番の要因です。
私も政治活動があるから、あらかじめ議題を決めておいてもらって、金曜の夜に奈良へ帰って、居酒屋で議論して決めていく、そして火曜に東京へ行く。酒を飲みながら会議をして意思統一を計ったというのが特徴です。そのときに夢を語った。若い頃会社勤めをしていたとき給料はよかったが、発展していくという実感がないのが不満でした。それで酒を飲みながら海外に学校を作りたいとか総合大学を作りたいとか壮大な夢を語り合った。それも西大和発展の原動力になったと思います。
一番苦心したのは、学校現場に役職がほとんどなく上司と部下がはっきりしない。縦の関係が無いから先生はいうことを聞きません。摩訶不思議な世界だなあと思います。公立ではいい仕事はできないと学校経営をしながらつくづく思います。
1万の兵がいても個々が、自分はどの立場でどういう戦いをするのかはっきりしないと役に立たない。ピラミッド型の組織を作るために、役職をたくさん作り、毎年3月に組織図を提示してその通りに動け、違う部署の部下に命じては混乱すると、組織図通り動くように今も口うるさく言っています。それも一致結束した先頭集団になっている要因だと思います。
株を買うならその企業の平均年齢を見ろ、37歳以上の企業の株は買うなと経済学者は言います。それで西大和中高の先生の平均年齢を32、33歳にしようと定めて、50歳台に入ると大和大学や白鳳短大の先生になってもらう。中高はほとんど20～40歳台の先生ばかりなのもうちの強みだと思います。一般に大学の先生というのは研究して論文や本を出すと評価が高くなるので、あまり教育には熱心でない。幸いなことに西大和の中高で鍛えられた先生は非常に教育力がある貴重な人材です。
進学実績でいくら京大合格数1位になっても灘へ行く子はうちに来てくれない。東大に入れないと全国的に評価されないので、2年前から東大にシフトして、灘に追いつくことを目指してそれを合い言葉にしています。来春は東大に50人合格させることを至上命令にして頑張っています。それから大和大学も学生数5千人を超える大学にしたいなあというのが学校法人西大和学園の大きな目標です。私も74歳になりましたが、もうちょっと頑張って早くその目標に達したいなあと思う今日この頃です。

高校入試に見る各都道府県の変遷（会員からのレポート）

東京都（中村基和 武蔵ゼミナール）

50年前に学校群制度といって生徒が行きたい高校に行けない制度を作って、公立高校の人気がガタッと落ちて私学に人気が集まるようになった。1970年代には私立校が専願で人気を集めて、1980年代は学校群制度は廃止されたが私立の人気は続いて、自塾の生徒の進学先は公立・私立と半々くらいだった。1990年代は都立の改革が実り、私立はバブル崩壊とともに人気が落ちた。1997に都立入試に英語のリスニングが入り、英語は長文が多くなり学力差で点数差が大きく開く。
2001に日比谷高校が重点進学校になり独自問題が出題される。2005に中高一貫校ができる。現在13校ができている。来春から学力試験と内申点の割合は7：3、内申で実技科目が2倍になるので実力があっても、実技科目が苦手な子は志望校を落とさざるを得ない。

千葉県(星野勝弘 オンフット進学会)

千葉県は東京、埼玉、茨城に接していて地域によってかなり差がある。私の塾がある柏市は東京から近く都内につとめている人も多くトップ層は中学受験して都内に出てしまう。柏市と隣の流山市は人口増加率が全国で3番目くらいでオールイングリッシュのマンションの売り出しが好評で、公立で定員割れはほぼ無いし、私立も定員オーバーで定員内に収めるよう教育委から叱

られているような状況だが、南部の地域は第1次産業が多いので少子化の波をもろに受けて全く逆の状況になっている。英語の入試問題で上位と下位層の差の開きが大きく、また配点の３分の１はリスニングである。

埼玉県(中山和行　中山塾)

毎年中３生が６万人位いて、６割くらいが約150ある公立高校へいく。ずっと２回入試をやっていたが、前期の人気校の倍率が５倍６倍になるというデメリットがある。現在は３月に１回の入試だけで、平均倍率は1.2倍でそれほど高くない。今年の入試から英数は２種類の問題を高校が選ぶやり方で、数学の平均点が低く、難易度の高い方の問題を上位20校が選んだところ、平均は43.5点、上位20校の下の方の偏差60弱の川越南高だと国語96点数学26点で合格した子もいました。補助金については埼玉県は全国トップクラスで年収609万円以下だと実質私立校の授業料は無料です。

大阪府(中村勲　地球塾)

橋下知事の登場で、教育に市場原理を導入したことと予算の配分を見直したことで大きく変わった。まず私学助成金を見直し、私学に激震が走った。それからぬるま湯の公立高校に活を入れた。学区制の撤廃と文理学科の設置による北野、天王寺などトップ校の進学実績の向上と、私学を無償にして公立と私立を同じ土俵で競わせて全体のレベルアップを図った。入試を前期と後期に分けて定員の一部を前期で募集したが当然、前期に殺到しておびただしい不合格者を出してその制度は3年間で終わった。紆余曲折はあったが、現在はほぼ3月の入試だけになり、がんばる生徒に寄り添う形の入試に変わってきたかなと思います。

奈良県(平野芳英　I塾大和高田教室)

奈良県は2005～2007に学校の統廃合が行われて、それまで専門学科だけで行われていた前期の入試が、全ての高校に実施された。普通科でも定員の2割位を先に募集し、上位の高校で学校独自の問題を作ったり、入試は2回になったことで、中高いずれにも教師の負担が大きくなったとか色んな問題が起きて2010には普通科の前期の入試はほとんど廃止されて、前期は専門学科だけになって現在に至っている。つまり全体として2005以前に戻ったわけです。各都道府県の入試制度を調べると、教育委員会の独立性が高くて情報が共有されていない。ある県でやった失敗を別の県でまたやっている。これがなんとかならないかなと思う。

兵庫県(寺田圭吾　あすなろ学園)

兵庫県の入試は2003から複数志願制が取り入れられ、第2志望まで志願できる。第1志望には志望者の90%が受かるようにと20～30点加点される。2015に16学区だったのが5学区に変わって各学区で通える高校が20～30校増えたこともあり、単独志願制が検討されているという話があります。2009に受験生の開示請求があって調べたら採点ミスが見つかったので全県で調べたら84%の高校で採点ミスが見つかった。そこから記号問題が増えてきて国語の作文もない。しかしこれから大学入試も変わるので、兵庫県も記述問題が増えていくのではと思います。大きな改革はおそらく今の中1生からではないかと言われています。

岡山県(山下典男　明修塾)

岡山県の現在の中3と小1を比較して1200人くらい減っている。平成元年だと32500人の中3が今年は18000人、都市部ではまだましだが山間部では非常に少子化が進んでいる。

全国学力テストで40番台と非常に悪い。以前は教育県と言われていたが、原因は非行率、1～19歳の人口千人あたりの刑法犯は岡山県が3年連続ワースト1位、これが今の結果に左右している。県も具体的な目標を掲げて小学生の学力テストが今年19位と改善され、家庭学習の時間を増やそうとか頑張っているところ。内申点も中1中2で悪いまま中3になるといけないので、去年から中1中2から入るようになった。県立中高一貫高4校のうち3校が進学実績をかなり上げてこれからますますそうなっていくと思われる。入試問題は国語で字数が2.5倍になって時間は同じ、英語でも平成17年と今年では1.42倍の単語数で、読解力が非常に問われる問題になっている。

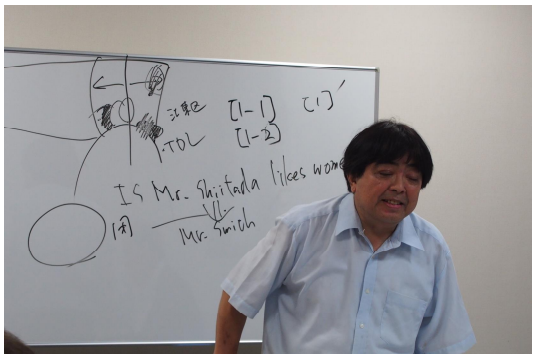
閉会の辞　内藤潤司（NPO塾全協東日本ブロック理事長）

10年間の間に5回ほど実行委員長をやらせていただきましたが、大変だったなあという感想とともにいろんなことを学ばせていただきました。今回色々なところからご報告をいただきましてありがとうございました。私も長い間塾経営をしておりますが、6年前に次男がイギリスに留学するときに下見に行って参りましてそのときのショックが忘れられません。ロンドンの有名な大学のオープンキャンパスで、そのときに中国人や韓国人やアジア系の方々がずいぶん並んでどういう科目を取ったらいいか悩んでいるところに遭遇しました。そのとき日本人は誰もいませんでした。18歳になったときに自分の資料を持ってどんどん並んでいけるような国にしなくちゃいけないんだと、そのとき私は強く思いました。ぜひ先生方、お互いにいろんなものを共有して2020年もそうですが、さらに先を考えて教育に従事していきたいと思っています。今日はありがとうございました。

懇親会場で　沖縄伝統の踊りが披露されました

第４１回教科指導研修会の報告　　６月１８日実施　報告　中村　勲

低学力の子供のためのプリントづくり
講師　中村基和先生（東京　むさし野ゼミナール）



東の中村先生にお越しいただき、講師時代と自塾の立ち上げ時のお話し、そしてそのころに積み上げた低学力の子供ががんばれるプリントづくりへの情熱等、塾の原点ともいえるお話しをしていただいた。とてもなつかしく思いながら、今もなお「できない子」に対するやさしい姿勢を持ち続けている中村先生に感銘を受けた。ジブリの森があったり、武蔵野は関西に住んでいるものにとって、緑豊かで知的な人々が住んでいるイメージがある。その武蔵野で塾を開業して３５年、ハイカラなイメージのある地域でレベルの高い指導とともに低学力の子供に対するやさしい眼差しを失わない姿勢はすばらしい。その姿勢はいつ、どこで培かわれたのだろうか。

自塾を立ち上げるまでの約１０年間、彼は雇われ講師として腕を磨いていく。教える地域がいわゆる東京の「下町」であったのも彼を奮い立たす原動力の元になったらしい。生徒のレベルは低いけれど気質は良い。そんな生徒を教えながら「英語は問題をやりさえすればできるようになる」という一般論は彼らに通用しないと気づく。当時低学力の生徒用の問題集はほとんどなかった。「自分で作るっきゃない」　be動詞と一般動詞の区別ができるように、タイプライターでプリントを作り始めた。「単語が変わるとできなくなる」つまり単語を変えると子供たちにとっては別の問題になると、彼は言う。そこで、生徒が繰り返し、繰り返し訓練さえすれば定着できるプリントを何枚も何枚もつくった。プリントに書き込む生徒にとってはどうだろう。「これでもかこれでもか」とプリントづくりに励む中村先生の情熱がきっと伝わったにちがいない

７０年代、不寛容を是とする時代精神の中、教育の現場に立つ者として、ゆずれないものというか、こだわりがあった。塾の存在価値として「落ちこぼれ」を見捨てず、見守り、なくす、そういう弱者への温かい視点が多くの塾にはあったと思う。今はどうだろう。悲しいかな、現実は、低学力の生徒は塾の経済基盤を補強する存在と割り切り、学力の高い生徒の指導に力をいれていると公然と話す塾もあるぐらいだ。実際、進学実績のある塾に低学力の生徒も集まる傾向があり、クラス分けをしてその子の学力に応じて指導すると宣伝する。しかし、それはあくまで建前である。実際は進学実績につながる高難度の生徒の指導に力を入れているのである。わからないことはない。なぜなら、教える側にとっては簡単な問題は苦労せず、準備もせず、教えられるが、難しい問題はやはり時間をかけて準備しないと教えきれないからだ。したがって最大の塾の問題は、「教えること」が「解くことができればできる」と勘違いしているところである。それゆえ、低学力の子供たちが「わかった」と思えるまでの指導は優先順位としては後回しになり、結局は怠ることになる。つまり、低学力の子供を支援する教育のスキルは工夫されないままきているのが多くの塾の実情かもしれない。それに対し、中村先生は違った。７０年代以来、低学力の生徒に対する指導のスキルを磨き続けてきたことは自塾の奥深さをアピールし、他塾と差異化する上で大きな財産となったはずだ。

低学力の子供を観察、考察する中で生まれたそんな彼の自作プリントを見てみよう。まず、英語だがbe動詞と一般動詞の区別ができるプリントを少しずつ単語をかえてたくさん作ったそうだ。その中で人称代名詞に弱いと気づく。彼の作成したプリントの大部分が代名詞を答えさす問題である。受け身を教えるときもbe動詞や三人称単数の復習をさせる、徹底ぶりだ。　英単語習得用のプリントもおもしろい。覚えるべき英単語を15個ぐらいあって、まずは英単語とその意味を書かす。そして空欄を半分ほど設け、覚える訓練が始まる。最後に英単語の意味と綴りを書けるか訓練する。5回訓練するわけだが、英単語の順番も毎回変えているのもさすがだ。工夫しているなと思う。面白いのは英語だけではない。算数の「たし算かな、ひき算かな」もおもしろい。この訓練は小学校だけでとどまらず、中1の「文字」の時にも力を発揮しそうである。

当日、50枚のプリント一式を中村先生から参加者全員に配られた。あらためてお礼を言いたい。